

【書評】

Sean Gaston, *Jacques Derrida and the Challenge of History*
(Rowman & Littlefield, 2019)

亀井大輔

本書は、デリダの仕事を「歴史哲学と脱構築的歴史記述 [historiography] のための基盤」(p. 1)として捉える試みであり、この仮説にしたがって、デリダの初期から後期までのテキスト群を読み解くものである。したがってタイトル「歴史の挑戦」が表すのは、〈歴史哲学と脱構築的な歴史記述という難題への、デリダの挑戦〉であるだろう。それは、「起源の論理とプログラ目的論によって定義されることなしに、実行可能な [viable] 歴史——および歴史記述——の可能性をいかに思考するのか」(p. 79)という課題(=挑戦)に応答することである。それが差延の思考、さらには出来事の思考を通じて追求されることになる。

著者 Sean Gaston は 1967 年生まれで、本書を含めすでに六冊のデリダをめぐる単著を刊行している。著者の回想によると(p. 97)、1980年代後半にデリダを読み始めた彼は、1988年にメルボルン大学で歴史を学ぶ学生としてリクールの『時間と物語』第三巻を読み、そのなかでレヴィナスの「痕跡」概念と出会い、そこからデリダの「痕跡」との関係も考え始めたとのことで、こうした関心に本書のテーマは遠く由来すると思われる。

本書の内容をざっと追うと、第一部「歴史哲学」は、デリダの 1960 年代から 1970 年代初旬までの思想を、その中心主題が「歴史」の問題であったという観点から読み解く。第一章では、フッサールの歴史主義批判をめぐるデリダの取り組みを手際よくまとめ、論点を明らかにしている。第二章は、2013年に刊行されたデリダの講義録『ハイデガー 存在の問いと歴史』に重要な役割を与えている。そして著者によればデリダは、1970年代初めに彼の「歴史哲学」を形成するにいたる(第三章)。それは、ハイデガーの『時間と存在』における贈与としての存在の思考を参照しながら、ex-appropriation(脱-自己固有化)の思想を形成することによって、デリダの「出来事」の思考が成立したと軌を一にする。

第二部「脱構築的歴史記述」では、この ex-appropriation の思想を軸として、いかにデリダの思想が歴史記述にとって基盤として貢献しうるのかを示している。そのために、1970年代中盤から1990年代にかけてのテキスト群を、コンテクスト(第四・五章)、記憶(第六・七章)、物語(narrative)(第八・九章)を主なキーワードとして考察する。デリダが身を置いた歴史的環境も考察に含め、歴史のなかに到来するとともに歴史のコンテクストをはみ出しもする「出来事」をいかに記述するかという、困難な歴史記述の実践としてデリダのテキスト群を読み解くものである。いずれの章においても、初期のハイデガー講義で取り組まれたさまざまな問題(Geschichte と Historie の区別、「物語を語ること」など)との繋がりにおいてデリダの中期以降のテキストを捉える議論が多

く、歴史をめぐるデリダ思想の連続性と展開が描き出されている。

本書の特徴は、第一に、デリダの初期思想における歴史の問題をしっかりと押さえたうえで、中・後期のテキストを視野に収めていることで、「歴史」という主題をめぐるデリダの思考を総体的に捉えていることである。第二に、これは特に第二部に当てはまるが、歴史という主題のもとに、特定のテキストに拘泥することなく、広範かつ網羅的にデリダのテキストから歴史にかかわる記述を参照していることである（そのため注も非常に多い）。この点では信頼度の高い研究書と言える（逆に言えば、各テキストへの踏み込みが甘く感じた箇所もある）。さらに付け加えると、「日付」についてのこだわりも興味深い。刊行や講義・講演の日付、デリダがテキストに記した日付、伝記的な出来事の日付などが、執拗なまでに詳細に記載されている。これは、デリダのテキストをクロノロジックに扱うためには大事なことであり、また本書では「日付」についての考察もなされている以上、必要な手続きであったのだろう。

気になるのは、本書のような議論が歴史学の分野にいかなる影響をもたらさうかという点である。20世紀後半の歴史学において、デリダの思想はバルト、フーコー、リオタールなど他の同時代のフランス思想とないまぜとなって「ポストモダン」の名のもとで、実証主義的で国家の枠組みにとらわれた近代的な歴史学に対する批判として受容された（歴史学者による、それに対する真摯な応答の一端として、岡本充弘『過去と歴史——「国家」と「近代」を遠く離れて』御茶の水書房、2018年を参照）。デリダの思想にもとづいて「脱構築的歴史記述」の可能性を考える本書は、よりいっそう脱構築の思想を歴史学の領域に近づける試みとも言える。それが歴史学におけるデリダ思想の意義を再考する機会を提供することを期待したい。

最後に評者の感想を付記すると、同じくデリダにおける「歴史」の問題に取り組む者として（また偶然にも同年にそれを主題とする著書を刊行した者として）、本書の第一部の内容はよく理解でき、著者の議論に同時代性と共感を覚えた。また第二部には多くの興味深い論点が含まれており、今後の研究を進めていく上でひとつの指針を与えてくれたと感じている。本書の議論を踏まえつつ、いかにデリダの歴史の思考を追求していくのか——評者もまた、本書からこうした「歴史の挑戦」を受け取ったことになろう。